

# Alt 54号

反天皇制運動

[通巻 436 号]  
2020 年  
12 月 1 日発行

第 54 期・反天皇制運動連絡会

朝鮮学園、また朝鮮高級学校生徒・卒業生が全国 5 ヶ所で提訴した「高校無償化」裁判において、10 月 16 日、30 日、広島、福岡の高裁は不当判決を下した。すでに東京、大阪、愛知の裁判については最高裁で不当判決が確定している。地裁・高裁合わせて 10 の判決の中で朝鮮学園の主張を認めたのは大阪地裁ただ 1 つであった。大阪判決は施行規則の規定ハ（朝鮮学校等を指定する根拠）の削除について「法は教育の機会均等の確保の見地から……各種学校の範囲の確定を文科省令に委任したにもかかわらず、下村大臣は、……教育の機会均等とは無関係な……拉致問題の解決の妨げになり、……という外交的、政治的意見に基づき、朝鮮高級学校を支給法の対象から排除するため、……ハを削除したもので、委任の趣旨を逸脱するものとして違法、無効と解すべき……」と朝鮮学校排除の不当性を認め、朝鮮学園の勝訴を導いた。今回の広島・福岡控訴審判決他の朝鮮学校敗訴判決はハの削除について「この点については判断を要しない」（広島）・「判断する必要がない」（福岡）とする一方、「不指定」は大臣の裁量の範囲内で、逸脱・濫用はないとして、原告敗訴としている。

裁判官僚の行政権力に対する「忖度」であるわけだが、そこには天皇が三権を握っていた大日本帝国憲法下の裁判とのつながりを見なければならぬだろう。主権在民の国であるならば、アメリカでさえ、下級裁判所が大統領決定を覆している。「すべて裁判官は、その良心に従ひ独立してその職権を行ひ、この憲法及び法律にのみ拘束される」（日本国憲法）であるにもかかわらず、現在日本の裁判所は大日本帝国憲法下の裁判所と同じく、他の権力を掣肘する意思を持たないのだろう。（ぐずら）

今月の Alt ●明仁天皇制の代替わりを経て次の時代をどう捉えるか！——\*2

反天ジャーナル ●捨てられし猫、映女、機関にすぎない天皇とは違うね\*3

状況批評 ●政権の危機と運動の危機——小倉利丸\*4

ネットワーク ●「その支出、ちよつとまったあ！」——「京都・主基田拔穂の儀違憲訴訟」を提訴——高橋靖\*6

太田昌国のみたび夢は夜ひらく（126）

●「コロナの時代に観る『スパイの妻』——太田昌国\*7

マスコミじかけの天皇制（53）（壊憲天皇制・象徴天皇教国家 批判 その 18

●象徴天皇の「代替わり」と「菊タブー」——天野恵一\*8

野次馬日誌\*9 集会の真相\*10 学習会報告\*11 反天日誌\*12 集会情報\*12



250 円

- 定期購読をお願いします（送料共年間 4000 円）
- 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス  
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス  
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/mail:hanten@ten-no.net>
- 以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>



今月の

Alert

## 明仁天皇制の代替わりを経て 次の時代をどう捉えるか

一月八日に秋篠文仁を「皇嗣」とするた  
めの、皇室典範にも旧皇室令にも規定のな  
い「立皇嗣の礼」がなされた。これにより、  
二〇一六年七月に現「上皇」の明仁が生前退  
位の意思表示を行なったことにはじまる、天  
皇制の「代替わり」過程は一区切りしたこと  
になる。私たちは、これに対しても反天皇制  
の実行委員会を組み立て、反対を表明する街  
頭行動を行なうことができた（詳細は別掲）。

これまでもたびたび述べてきたように、  
虚構の「男系」血縁主義に基づく天皇制の「皇  
位」継承の流れは、継承の該当者がしだいに  
死滅していくことにより制度的にも危殆に瀕  
しつつある。天皇に関する制定憲法上の制限  
を大きく逸脱してその権能を拡大した、明仁  
の危機意識によるふるまいと、皇室典範特例  
法の制定により、今回の継承過程は済ませる  
ことができた。しかし、ほんらい明仁や他の  
皇族たちが望んでいた「皇位の安定的継承」  
につながる皇室典範の全面的な改定には、右  
派勢力の反対によって踏み出すことができな  
かったようだ。なお残る各国の王政において  
も徐々にすめられつつある、性別を問わな  
い長子継承制度など王位継承ルールの改定は、  
安倍やその周辺の影響が残る当面のあいだは  
なされないと思われる。

「皇女制度の創設」という報道が、一月  
二三日に一斉に流された。これは、女性「宮家」  
の創設により、形式的であれ女性皇族の「皇  
位継承」の可能性を残すものとはまったく異  
なっており、皇室典範第一章はもちろん、女

性皇族がその婚姻後に皇族から離脱するとい  
う皇室典範一二条も、皇族から離れたものが  
復帰できないという同一一五条にも触れるもの  
ではない。元女性皇族が、「皇室の負担軽減」  
のため特別職の国家公務員になるというもの  
であり、そのための「尊称」なのだという。  
これが天皇や皇族たちの意図する一族の安定  
とは異なり、かつ、皇族「もどき」の存在を  
増やすことで、皇室経済や警護など制度面を  
拡大することは想像に難くない。すでに結婚  
の意思を明らかにしている眞子ら秋篠の二人  
の娘や、愛子、天皇の妹の黒田清子らが「皇女」  
として想定されているらしい。

天皇制やその維持につながる提案や行動に  
は、いっさい与することをしたくないが、か  
といって、天皇制の存続が悠仁ひとり託さ  
れたことで、より困難で危うくなることが明  
らかでも、このような新制度による弥縫策に  
加担するわけにいかない。法と制度の規範的  
な役割を考えれば、皇室典範の定める女性皇  
族の不平等と劣位は、この国家の人権制度全  
体にも影響を及ぼしているものであり、「皇女制  
度」にも反対するのが当然だ。



このかん、君主制の安泰を誇っていた国々  
でも、その権力に対する批判がさまざまに  
噴出している。公然と反対者を暗殺するサウ  
ジアラビアほどではないとしても、宗教的権  
威や軍とも一体化した権力を誇ってきたタイ  
の王政に対し、プーミボンの二〇一六年の死  
後、後継となった現在のラーマ十世への批

判が、今年になって大規模な大衆運動として  
連日にわたり展開している。ウェブメディア  
のプラチャタイ (<https://prachatai.com/en/thai>) によると、最近も、莫大な資産が  
王室財産法により隠蔽され、一族が在住して  
いたドイツなどヨーロッパに隠されているこ  
とへの批判が、学生らによる行動として噴出  
している。今年はコロナの影響でマイナスが  
見込まれるとはいえ、一時のアジア経済危機  
を除いて長期にわたって拡大を続けたタイの  
経済は、国王の私腹を大きく肥やしてきた。  
これに対する批判も「不敬罪」により圧殺さ  
れてきた。こうした認識は、大衆的な問題意  
識として共有されつつあるという。

いま、私たちは、二月の「紀元節」や「天  
皇誕生日」に抗議する運動の準備をはじめ  
ると同時に、この五年近くにわたる第一〇期の  
反天皇制運動連絡会の活動の総括を開始して  
いる。二〇一六年の初夏に開始した今期のテ  
ーマは、しばしば病を伝えられてきた「明仁の  
Xデー」であった。それは、直後の退位意思  
の表明により想定とは異なる形で展開したが、  
一連の「代替わり」過程に向けて、十分では  
ないとしても持続的に意味ある闘いを提示す  
ることができたはずだ。とはいえ、そのスタ  
ートから三〇年にも及ぶ明仁天皇制との対峙は、  
個々人の意志と身体にとっては、誰にとつて  
もまったく楽なものではなかった。どのよう  
に区切りをつけるか、友人たちとともに考え  
ていきたい。

(編纂)

## 未来だって案外イジワルなのだ

近未来SF映画の数々に影響を与えたとされる『ラ・ジュー』(クリス・マルケル監督、一九六二年)をコロナの夏に再見。わずか二八分の、古典とも言える映画だからか、妙に生々しい。世界は第三次世界大戦で破壊され、生き残った人類は放射能汚染から地下に逃れているが、そこを支配するのは戦争の勝者たち。収容所に集められた捕虜たちは、危険なタイムトラベルの人体実験で次々と犠牲となっていく。主人公の男は過去へ、次いで未来へと送られるのだが……。

ここにある「未来」とは占領者たちのものだ。未来からの支援がもたらされると、男は抹殺される。人類を滅亡から救うと言いつつ、結局は支配権力の存続のためじゃんと言いたくなるのは、主人公への感情移入ではなく、コロナ禍に追い討ちをかける「いわゆる専門家」たちの妄言を思い出すからだ。政府の感染対策への批判や要求を潰そうとする姿は、忖度など通り越してほとんどマッドサイエンティストだ。

この間、戦前に遡った感染症対策への批判も読んだ。この国の軍隊はいったん滅びたはずだが、防疫部隊だけは生き延びていたというのか。主人公の男は平和な未来からの誘いも断って、過去の記憶に戻っていくのだが、それが抵抗し、生き直すための大切な場所だからだろうか。

(捨てられし猫)

## 女性と黒人が米大統領選を決定

「二〇二〇年は女性の年」、一九二〇年合州国憲法修正一九条により、女性に参政権が認められてから百年。民主党副大統領候補に初の女性・黒人とアジア系のカマラ・ハリスさんが選ばれ、下院選に過去最多の女性が出馬。

二〇二〇年米大統領選を決したのは、女性票だった。そして白人警官による黒人殺害に怒った「ブラック・ライブズ・マター(BLM)」運動。

二〇年一月一日の米CNN放送によると、今回の大統領選は、この百年で最高の投票率六六・八%を記録。民主党のバイデン候補が七八一八万票、トランプ大統領七二七六万票。争点は世界最悪の感染者と死者を出しているコロナ・パンデミック。

「男性よりも高い投票率で、女性がバイデンを勝利に導いた」と分析するのは、ジャパン・タイムズ紙(一月一六日)。同紙によれば、バイデン氏の成功は激戦州での白人女女性。黒人女性とラテン系女性の大多数を全米で獲得。

トランプ氏に対する女性たちの怒りは、二〇一七年一月二〇日大統領就任式翌日、ワシントンや全米各地での数十万人の女性たちの抗議行動・ウィメンズ・マーチで爆発した。

「歴史を変えた」選挙に黒人女性の九一%がバイデン・ハリスに投票。大統領は女に屈す!

(映女)

## 王様って奴は!?

不敬罪による弾圧にもめげずに、王政改革を含む民主化を求めるタイの民衆によるデモが続いている。抗議デモはブラユット首相の退陣を求めているが、首相支持派は、「国王の意思」を力に反転攻勢の構えという。

現在の国王は、二〇一六年に即位したワチラーロンコーン(ラーマー十世)である。周知の如くこの国王は評判が悪い。体中の入れ墨や三度の離婚と四度の結婚はまだご愛敬だが、即位後の一八年七月には、一九三〇年代以来、王室財産管理局で一元管理されてきた王室財産を、国家管理から国王による個人管理に変更した(財産は、約四・五兆円で王室財産世界一位。英国王室の八〇倍)。この金を手にして、さらに昨年、タイ王室では一〇〇年ぶりとなる側室までおいた。

国王自身によるこうした「逆向き」の「王政改革」が進んでいる状況では、民主化を求める民衆が、「王政改革」の要求を掲げるのは当然だろう。

この王は、基本的にタイでなくドイツで生活しているが、今年の三月は、コロナを避けるためにバイエルンにあるアルプスを一望できるホテルを全室貸切り、側近数一〇〇人+愛人二〇人とともに隔離生活を送っていたようだ。ここまできると「王政改革」の問題ではないようだが……。

(機関にすぎない天皇とは違うね)

# 状況批評

思想・状況・批評

## 政権の危機と運動の危機

小倉利丸（批評家）

発足間もない菅政権だが、戦後保守Ⅱ右翼政権の性格と近代日本Ⅱ資本主義が構造的にもつ本質的な問題が、既にいくつか露呈している。COVID-19対応では相変わらず経済ナショナリズムのために人々の生存を犠牲にする政策がとられており、感染爆発から命の選別へと向うことは必至だ。人的資源Ⅱ〈労働力〉として、費用対効果でいえば若年層の救命の方が資本にとっても政府にとっても利益になるから高齢者はまともな医療サービスを受けられずに犠牲になっていくだろう。この冷酷なシステムの構造的な要請を政治がどのようなレトリックで誤魔化すか、これが菅政権に課されたある種の宿題だ。

菅政権発足直後にまずぶち上げたのが「デジタル庁」の設置だった。デジタル庁は、安倍がビッグデータ、AI、そして5Gネットワークを踏まえて凡庸な文明史観をもとにでっちあげたsovereignを継承したものといえる。デジタル庁の設置は、省庁横断とマイナンバーの普及がセットになっているように、次世代監視テクノロジーの政府組織への導入であった、これが私たちの市民的自由に及ぼす影響は深刻だ。

デジタル庁問題が深刻なのは、民主主義の基本をなす立法と司法がほぼ完全に解体する、ということだ。法のかわりにコンピュータによるコードの支配が進み、法は形骸化する。なぜならコンピュータに法を遵守する意志はなく、コンピュータのプログラムの適法性は、技術的に難解で国会でも司法でも判断できず、私たち一般人も理解できないからだ。政府だけが、民間IT企業と組んで統治の意図をコンピュータのコードに組み込むことができる。AIとビッグデータによる将来予測に政策が依存するようになり、国会での討議や司法による裁判という時間がかかるプロセスもよくて現実の後追いがせいぜいのところとなる。機械は過去から社会の常識や規範を「学習」するために、差別、偏見やナショナリズムの偏りを学

び、反政府的な言動を社会的なリスク要因としてプログラムされれば、弾圧を正当化する道具にもなる。

デジタル庁は市民運動からの批判がまだ低調なままだが、日本学術会議の任命拒否問題では市民運動もメディアも大学や学会もおしなべて菅への批判を強め、任命拒否撤回の主張が大きくなっている。多くの市民運動も任命拒否を批判するとともに、学術会議擁護の立場をとっているように思う。しかし現場の大学教員としての経験でいえば、学術会議は学問の自由を侵害するような行動をとっており容認できないのだ。学術会議は多くの提言などを出しており、任命問題の是非以前に、そもそも任命された学術会議のメンバーたちがやってきたことが、その活動内容に即して検証されるべきだ。

私の経験とは以下のことだ。学術会議は二〇〇八年の文科省から大学教育の分野別質保証の在り方について審議依頼を受け、大学教育のある種の学習指導要領作りを始める。教育内容に介入するようなことをやりはじめた。私の専門でもある経済学については、ここで詳細は述べられないが、全く容認しがたい内容で、このガイドラインに則せば私は大学教育での居場所はなくなくなる。私の人生の多くを教育に費してきた者として絶対に譲れない一線だ。学術会議を擁護するなど私にはできない。

それだけではない。出された提言のなかにはとうてい容認しがたいものがある。たとえば、小中高の学校教育への提言ではGIGAスクールの推進を前提としたIT教育の導入を積極的に推し進める提言を出し、生徒の成績などの個人データの収集を積極的に実施すべきだと主張している。また、新型コロナウイルス対策としての医療データの活用のためにマイナンバーカードなどの行政システムを支えるデジタル環境の再整備を主張する提言を出したり、「行政記録情報の活用に向けて」の提言では、統計調査にマイナンバーを利用できるような提言している。研究にビッグデータを活用するリスクはすでに指摘されている。二〇一六年の米大統領選挙でGoogleの膨大な個人情報報を研究目的で提供し、これがトランプ陣営に利用された。研究目的を隠れ蓑にこうした深刻な問題が起きることがありうるのだ。核問題についても原発容認の姿勢は崩れていない。今年九月「原子力総合シンポジウム2020」を「2050年の持続可能社会の実現にむけたシナ

リオと原子力学術の貢献」のテーマで開催するが、とうてい反原発運動が容認できるような内容ではない。今年春に学術会議は二〇五〇年をみすえたレポートを公表する。「未来からの問い——日本学術会議一〇〇年を構想する」と題された四〇〇ページのレポートのなかで、安倍政権が政策として推進してきた Society5.0 というかがわしい歴史認識をまるごと受け入れ、さらには「総務省が推進しているマイナンバー制度も、複数の組織に所属している個人情報を一元化してさまざまな申請をしやすくします。今後、情報管理を徹底することによって、情報の漏洩やなりすましなどの犯罪を防止できれば、もっと用途を拡大できるでしょう。」と礼賛している。今年の九月まで学術会議の議長は京大の人類学者で総長だった山極壽一だ。彼は日本の植民地主義と学術の責任に深く関わる京大の琉球人骨問題で一貫して消極姿勢をとりつつけてきた。その山極を学術会議は会員の互選で選んできたのだ。

学術会議を政府から独立させる議論もあるが、そうならば学術会議は映倫のような自主規制団体になるだけであり、現状のままなら政権のアウトリーチとしての役割を担うだけだ。表現、思想信条の自由にとって必要なのは、自由に関わる制度を一つでもなくすことだ。私の三〇〇年の研究者、教育者の仕事のなかで必要と思ったことは一度もない。学術会議は学問研究にとって不要である。学術会議擁護の運動をしている市民運動などの皆さんには是非、学術会議は擁護すべき機関なのか、再度検証していただくことをお願いしたい。

市民運動をはじめとする社会運動は、私の目から見ると、これまでにない危機的状況を迎えつつあるように見える。COVID-19 に関していえば、政権の対応、医療と経済について私たちがどのような判断を下すべきなのかについて、政府や支配的な制度とは別の観点からの提起をすることができているだろうか。マスクを拒否するマッチョな極右の価値観とも自粛と自己責任を強いる政府とも立場を異にする私たちの分析が非常に足りないと思う。市民運動は政党の政策論議や国会政局から自由になり、資本主義経済の本質や身体と医への権利といった根本問題を問い、原則を貫くスタンスをとらなければならないのではないか。既存の教育制度や学者の権威を肯定しすぎではないか、とも思う。教育制度による差別と選別へ

の根底からの懐疑を運動の基盤に据えるべきなのではないのか。菅政権と産業界のデジタルへの流れに対しても、デジタルの日常生活を問う運動に至っていない。ネットもパソコンも理解を超える難解な機械であること自体が支配のツールになっているわけだが、同時に、運動として使えるなら、Facebook であれ LINE であれ何でも使えばいいという安易な利用主義が、ネットに伏在している高度な治安弾圧を自ら呼び込んでいることになっていると思う。

さて、最後に天皇制について一言だけ述べておく。COVID-19 と各国の王室動向をみると、いずれも危機にありながら国民統合の積極的な役割を果たせていない。天皇制を現代的な問題として重視する意義が見出しにくい状況になっているともいえる。たぶん、これは COVID-19 だけの問題ではなく、社会のコミュニケーション環境がマスメディア中心から SNS などネット中心へと確実に変化しており、この変化に旧来の統合装置が対応しきれていないことによると思う。この意味でいえば政権や支配層にとつてもある種の実権の限界に直面しているともいえる。他方で、SNS は多様な極右の言説が流布する場にもなっており、どの国でも移民・難民への差別と排外主義、様々な伝統主義的な価値観への回帰と宗教的な信条が目立っている。日本の場合も、多様な日本的なものや日本文化から憎悪のヘイトスピーチまでが星雲状の言説空間を構成しながら、これらの帰結としてナショナリズムと「天皇」と呼ぶような象徴的な空間が、従来とは異なる性格をもって構築されるように思う。マスメディア時代とは根本的に違い、大衆自身がマスメディアやフェイクニュースの言説を受容しつつ、彼ら自身が更に発信主体となって支配的な価値観や心情を支える、といったメカニズムのなかでイデオロギー装置が構築される。この意味で、現実の空間での天皇ではなく、バーチャルな空間において、天皇という言葉すら明示されないような言論のなかに密かにもぐりこむようにして——とりわけリベラルな知識人やある種の左翼もどきの知識人の言説をも包摂しつつ——天皇制イデオロギーが表出するようにするのは、と感じる。この意味で天皇制を支える構造そのものの変容にも注目しつつ天皇制批判のバージョンアップを図ることが必要になっていると思う。

# なんどへ NETWORK

「その支出、ちよつとまったあ!」——「京都・主基田拔穂の儀違憲訴訟」を提訴

高橋 靖（京都・主基田拔穂の儀違憲訴訟団事務局）

幸か不幸か、今回の天皇代替わり儀式での「主基田」に京都が選ばれ、われわれはそれに対してアクションを起こすことになりました。

昨年の七月、「天皇の代替わりに伴う違憲行為を監視する有志の会」を結成し、京都府知事宛てに「政教分離を定める法令を遵守し、府知事をはじめとする府職員に、これら即位・大嘗祭にかかわる諸儀式に関与させたり、公金を支出するなどの違法行為をしないよう厳重に注意し、国（宮内庁）などから関与の要請があっても、憲法遵守の観点からきつぱりとこれを断る」よう要望書を出しました。

しかし、京都府はその要望を無視し、昨年の九月から十一月にかけて、「主基田拔穂の儀」他、「大嘗祭」関係の儀式に京都府知事他京都府職員が参列したのです。今年八月二一日、京都府監査委員会に対し京都府知事らの「主基田拔穂の儀」他大嘗祭関連の諸儀式への参列に要した公費の違法支出を問う監査請求をしましたが、一〇月五日付で京都府監査委員会はその監査請求を棄却しました。

ということで、「京都・主基田拔穂の儀違憲住民訴訟」の提訴の準備をすすめ、一一月四日、京都地裁に提訴しました。

この訴訟の原告は監査請求人全員。弁護団は、三〇年前の原告約一七〇〇人を擁した即位礼・大嘗祭違憲訴訟の中心となった加島弁護士他、安倍首相靖国参拝違憲訴訟の弁護士合わせて大阪弁護士会の六人と、諸富弁護士他オンブズマン関係等の京都弁護士会の弁護士の合わせて四人、計一〇人の弁護士です。

一一月一四日には、支援集会を開催しました。最初に原告兼事務局の代表として菱木政晴さんがこの訴訟の提訴に至るまでの経過を簡単に説明した後、原告、弁護団のメンバー全員に発言してもらいました。原告の方々の発言は一人ひとりのさまざまな立場からの発言でたいへん聴きごたえのあるものでした。諸富弁護士からは、「憲法を住民訴訟の中で問うてゆくことは意義が深いことなのでぜひご支援をお願いしたい。」と要請も述べられました。

いくつもの政教分離訴訟を担ってこられた加島弁護士からは、「最高裁が言っていることは論理的にムチャクチャなのでいつかは覆すことができるはずだ。『社会的儀礼』で何でも通すな、そうはいかないぞということ訴え続けなければならぬ。判決は一回ではひっくり返らないので、裁判を繰り返して、われわれはへこたれないことを

示さなければならない。最高裁をやっつけるつもりで京都と大阪で力を合わせて、法廷でもしるい弁論を展開してゆきたい。」と述べられました。

最後に菱木さんが「三〇年前に比べて、周りの状況は悪化しており、状況は厳しいけれど、われわれが支援者を増やしてがんばってゆきたい。いっしょにがんばってゆきましょ」と締めくくりました。

この集会には、東京地裁で闘われている「即位・大嘗祭」違憲訴訟団から辻子実さんが駆けつけてくださり、激励の言葉をいただきました。東京での「即位・大嘗祭」違憲訴訟はいわば正面突破の国賠訴訟で、この京都での「主基田拔穂の儀違憲訴訟」は側面攻撃の住民訴訟です。「大分拔穂の儀違憲訴訟」の二〇〇二年最高裁判例は原告敗訴ですが、最高裁の政教分離訴訟の判例も変わってきており、「大分拔穂の儀違憲訴訟」判決をひっくり返せる勝算も十分あると思います。

東京と京都から力を合わせて天皇制を挟み撃ちにしてゆきたいと思っています。みなさんの支援をよろしく願います。

みたび

# 太田昌国の夢は夜ひらく 126

## コロナの時代に観る『スパイの妻』

居住地域で二〇一五年の安保関連法案反対運動を一緒に始めた仲間と、小さな反戦・平和の運動が続いている。先日は松村高夫氏の講演会「コロナとペスト——七三一細菌戦部隊の今日的意味」を開いた。氏は、日本帝国主義下の植民地における労働史・社会史の研究者で、七三一部隊に関する研究・発言も多い。松村氏は今回の講演の冒頭で、一九四〇年アルジェリアのオラン市で起こったペスト流行をテーマとしたアルベル・カミュの『ペスト』が今回のコロナ禍の中で話題となり、読まれ、多くの人びとが言及しているが、同じ時期の一九四〇～四二年に中国でペストが流行したのは、日本軍のせいであることに言及するものがほとんどないことは重大な欠陥であると話し始めた。

この点については、私も思いを同じくする。私は、「三密を避ける」などのコロナ対策がすでに謳われていた二〇二〇年三月末、某所で「コロナの時代の愛と連帯をめぐって」と題する講演を行なった。そこで最後に触れたのは、今や世界中の国家が、国を挙げてコロナウイルス対策に力を尽くしているかに見えるが、国家というものは、戦時にあっては、占領した「敵地」において感染症を流行させるための実験を行なうような実態を持つ機構でもあることに触れた。もちろん、一九三六年から

四五年にかけて、中国東北部ハルビン郊外に設置されていた日本陸軍七三一部隊が行なった中国人捕虜に対する生体実験と、浙江省や湖南省でのペスト菌散布のことを指したのである。いま、ここで直面している感染症の問題に関しては、即時的な対応策を講じることは理の当然として、人類とウイルスの関係については歴史的かつ文明的な興行きの中で考えるべき課題も多々あって、それを日本の地において考えるとき、日本軍が中国民衆の上にペスト菌を散布した八〇年前の史実を思い出さずにはいられなかったのだ。

しかも、この史実は、この社会で広く知られているとは言えない。敗戦必至の段階で証拠隠滅が行なわれた。敗戦国・日本を占領した米国は部隊幹部や医師たちの戦争犯罪を免責したうえで、人体実験などの資料をすべて米国に引き渡させた。日本政府は資料の公開を阻み、事実に向き合おうとしてこなかった。免責された専門家たちは戦後過程において、大学医学部再編、自衛隊病院、医薬品・医療器具メーカーなどで「重責」を担い続けた。「戦後平和主義」の「虚」は、ここでも顕わになっている。

この問題に鋭く触れた表現が、思いがけないところから現われた。今年のヴェネチア国際映画祭



で銀獅子賞（監督賞）を受賞した黒沢清監督の『スパイの妻』である。これが優れた作品であることを認めつつも、物語の構成における「横行する歴史修正主義を裏返した、良心的、願望的修正主義の安易さ」を指摘する小野沢稔彦の批評（『映画芸術』四七三号）は挑発的にして魅力的だが、ここでは深入りしない。軍国主義の風潮が広く社会に浸透する一九四〇年ころ、「洋風」の生活スタイルを賣いて神戸で優雅に暮らす主人公夫婦の人生が暗転し始めるのは、夫が日本帝国支配下の満洲へ出張し、そこで恐るべき「国家機密」を知るのだが、コスモポリタンとしての彼が、それを国際的に告発しようとして以降だ。その機密とは、細菌兵器の開発研究および人体実験のもようを記録した映像とノートに他ならないのだから、史実としての七三一部隊の所業が描かれていることがわかる。

だが、この映画の劇場用冊子ではそこに何も触れていない。大方の映画評でも、これを名指しして論じるものは少ない。この映画は、コロナウイルス流行以前に企画され、制作された。公開の時期が、偶然にも、このコロナ期にぶつかっただけだ。とはいえ、映画とは、観客が観てそれを（状況的に）評することではじめて完成するものだ。「敵地」でペスト菌や炭疽菌をつくり、人体実験まで行なっている帝国の現実を知ることと流転し始める富裕層の夫婦の物語を、その旧帝国の地にあつて、しかもコロナ禍のいま論じるときに、七三一部隊という具体的な名指しを欠いては、批評として成り立ちようもないと思う。

（11月27日記）

ミミの  
いけ  
天皇  
53

## 象徴天皇の「代替わり」と「菊タブー」

——「壊憲天皇制・象徴天皇教国家」批判 その18



天野恵一

一月八日、「天皇も後継ぎもいない!」11・8『立皇嗣の礼』反対緊急行動」を私たちは、原宿の神宮橋の上でデモ前アピール行動と、そしてデモというスタイルで実行した。病人など続出で、実行委スタッフが不足、やむなく徐々にフラフラしている私の主催者としてのアピールでスタート。

デモ隊への右翼の暴力的な介入や脅迫は、いつもよりハデというわけではなかったが、私の横について歩いていた女性が、突然殴りこんできた屈強な男(右翼)に突き飛ばされ、転倒するという事態が発生。あわてて助け起こしていると、私の後の列にいた古い友人が「狙っていたのは、まちがいなくあんただ、気をつけるよ」と声をかけてくれた。

「アピール」などしてデモを歩いていたら、そういうことかと、かなり緊張を強いられて行進。機動隊員の目の前での公然たる暴行(彼女は軽い肉離れですんだが)、それでも、その右翼は何事もなかったようにその場を逃げだし、その後もデモ隊を脅迫し続けた。警察は、あいかかわらずやらせ放題である(なんたるデキレース)。

今回の「代替わり」のラストの抗議行動も、天皇主義右翼の暴力と市民警察の仮面をかなぐり捨てた「公安」警察のハレンチさを強く印象づけられて終わった。

考えてみれば、今回の「代替わり」に対する大衆的抗議行動のスタートの時、その吉祥寺行動でも右

翼のメチャクチャな暴力が突出した。その時の行動は、このニュースで報告していたはずだ。二〇一六年二月号(No.6)『平成代替わり』状況に露出する(暴力とタブー)がそれである。その時は、私は宣伝カーに乗り込もうとしたら、車はすでにフロントガラスが破損しており、近づいて乗れるような状況ではなかった。自分の文章を引く。

——「陛下を否定する非国民どもめ!」と叫びながら、眼前で殴りかかり蹴倒そうと暴行を繰り返す天皇主義右翼。機動隊員たちは、とりあえず暴行がいきすぎないように阻止はしてみせるが、押し戻せばそれだけ、右翼暴力団はソロソロと、機動隊のわきを歩き続け、暴力的介入をくりかえす。デモ隊の中にいた私は、こんなシーンを目撃した。右翼のリーダーが『謝罪しろ!』と機動隊のリーダー風の男につめよっているのだ。もみ合いで機動隊員に殴られたというのだ。車のフロントガラスは破壊され、横断幕、マイク、プラカードなども破壊し奪つ、暴力と盗みの現行犯に『謝罪』を要求され、警察の方がマズイナーという顔をしてオタオタしているのだ。/いつものように完全なデキレース。逮捕はないから脅迫はOK、ただし、やりすぎるなどという話のできるのだろうか。——

「ここでも私は刑法上の「不敬罪」はなくなっても(不敬)のイデオロギーは、右翼の中にだけでなくマスコミの中に、そして国家(警察)の中に、生き続

けているという点を強調している。やはり戦後憲法の保障している「言論の自由」は、隠然たる「菊タブー」を前提にのみ成立しているものにすぎないのだ。

原武史・吉田裕編の『岩波 天皇・皇室辞典』(二〇〇五年)の「菊タブー」の項目を読んだ。それは深沢七郎の「風流夢譚」に始まる、戦後の右翼による言論へのよく知られた「テロ事件」や政治家への右翼テロを具体的に示しつつ、以下の文章で結ばれている。

「88年に昭和天皇が病に倒れると、各地で華美な行動への自粛が行われ、タブーが社会に表面化した。その中で12月に本島等長崎市長が天皇に戦争責任があることを表明し、90年1月に右翼に銃撃されて重傷を負うという事件も起きた。だが、昭和天皇の死と冷戦の終結は、確実にそのタブーに変化をもたらしている。特に昭和天皇側近の日記などの相次ぐ公表によって、天皇の戦争への関与が実証レベルで冷静に論議されるようになった点は大きな変化である。この点を取ってみても、タブーがなくなつたとはいえないが、弱まっているといえることはいえる」(傍線引用者・瀬畑源の文章)。

なんたるトンチンカン。学問の上の論議は「自由」になっても「平成天皇」時代、タブーは強まり続け、「反天皇制」のみならずいろいろな集会やデモへの右翼の脅迫は、日常化しており、警察の「不敬」取り締まりも、マスコミの天皇制批判言説の排除とひたすらなる皇室賛美も強化されてきた。こうした「トンチンカン」があたりまえのように通ってしまっているところに(象徴天皇制の菊タブー)の政治的性格(タブーと感じさせない強力なタブー)がよく示されている。

# 野火風日誌

11月1日～11月27日

11月1日

明治神宮◆明治神宮で「鎮座百年祭」が行われ、徳仁からの供え物である「幣帛」がさげられる。

11月2日

徳仁、雅子、秋篠宮、紀子◆徳仁、雅子が皇居を訪れ、8日に控えた「立皇嗣の礼」のリハーサルに臨む。車で皇居に入り、別の行事に臨んだ後、リハーサルで儀式的所作などを確認。秋篠宮、紀子が参加。

11月3日

「秋の叙勲」◆文化勲章の「親授式」が皇居・宮殿で開催され、徳仁が勲章を手渡す6人が選ばれ3人が欠席。例年実施していた天皇、皇后と文化勲章受章者らとの懇談は、開かれぬ。

11月4日

皇位継承策◆菅義偉首相が衆院予算委員会で、安定的な皇位継承策に関し、8日の「立皇嗣の礼」終了後、速やかに検討する意向を示す。

11月5日

徳仁◆皇居を訪れ、「立皇嗣の礼」が8日に行われることを報告するため、伊勢神宮などに使者の勅使を派遣する「勅使発遣の儀」に臨む。神宮のほか、神武天皇の陵と昭和天皇の陵にも勅使を派遣。それぞれの勅使に「御祭文」を託す。

11月6日

眞子、佳子◆創建から100年を迎えた

明治神宮（東京都渋谷区）を参拝。

11月7日

「立皇嗣の礼」◆菅義偉首相が皇居で「立皇嗣の礼」の所作確認。

皇位継承策◆政府内で結論提示の見送り論が強まったと、複数の政府関係者が明らかに。男系維持か女性・女系天皇容認かで国論は二分されており、政府として明確な案をまとめるのは時期尚早との判断に傾き、次善の対応として、女性宮家創設を含む皇族数減少対策に踏み込めるかどうかが焦点。

「殉職」自衛隊員追悼式◆菅義偉首相が防衛省で自衛隊殉職隊員追悼式に参列。

11月8日

「立皇嗣の礼」◆「立皇嗣の礼」が皇居・宮殿で開催され、「国事行為」の中心儀式「立皇嗣宣明の儀」で、秋篠宮が「皇嗣としての責務に深く思いを致し、務めを果たしてまいりたく存じます」と、徳仁、雅子を前に決意の言葉を述べる。宮殿「松の間」で開催。古式装束「黄櫨染袍」をまとった徳仁「皇室典範の定めるところにより文仁親王が皇嗣であることを、広く内外に宣明します」。「黄丹袍」を着た秋篠宮「立皇嗣宣明の儀をあげていただき、誠に畏れ多いことでございます。傍らに装束姿の紀子が立つ。菅義偉首相が祝辞である「寿詞」を述べる。成年皇族のほか、三権の長や地方自治体の代表、

外交団長ら46人が参列。鳳凰の間で、秋篠宮が、皇太子の印として伝わる「壺切御剣」を徳仁から授けられる。馬車で宮中三殿を訪れ、拝礼。午後、「国事行為」の「朝見の儀」で秋篠宮が徳仁、雅子に感謝の気持ちを伝える。秋篠宮、紀子が朝見の儀を終え、東京・高輪の仙洞御所を訪れ、明仁、美智子に立皇嗣の礼の終了を報告。新型コロナ対策で約50人に絞った祝宴「宮中饗宴の儀」や、皇居などでの一般の記帳は中止。／大島理森衆議院議長、山東昭子参院議長が、「立皇嗣の礼」に関し、それぞれ「謹言」を発表。

11月10日

皇位継承策◆「日本会議国会議員懇談会」が、加藤勝信・官房長官を首相官邸に訪ね、男系による皇位継承の維持を申し入れる。安定的な継承のため、旧宮家の男系男子の皇籍復帰を提言。

11月11日

徳仁◆「秋の叙勲」のうち大綬章の「親授式」が皇居・宮殿の「松の間」で開かれ、計9人に勲章を手渡す。

11月12日

秋篠宮、紀子◆赤坂御用地の宮邸で、海底の地質試料を分析、研究する「高知コアセンター」をオンライン視察。高知市で開催予定だった第44回全国高校総合文化祭（総文祭）に合わせて夏に訪問予定だったが、新型コロナウイルス禍で取りやめとなった。

皇位継承策◆菅義偉首相が、「日本会議国会議員懇談会」のメンバーと官邸で会い、男系による皇位継承維持を求める提言を

受け取る。

11月13日

徳仁、雅子◆赤坂御所で、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身茂会長から進講を受ける。

眞子◆宮内庁が、眞子と小室圭との結婚関連行事が延期になっていることについて、眞子の「お気持ち」文書を公表。宮内庁が、秋篠宮、紀子が、結婚を希望する2人の気持ちを尊重すると説明。眞子は文書の公表に当たり、徳仁、雅子や明仁、美智子にも報告したと報道。

11月16日

東京五輪◆菅義偉首相が、国際オリンピック委員会のバッハ会長と官邸で会談。

11月18日

徳仁、雅子◆赤坂御所で、新型コロナウイルスの医療機関での対応状況を聞き取るため、日赤医療センターと北海道、福島、沖縄の各赤十字病院をインターネットでつなぎ、視察や懇談をする。日赤医療センターの新型コロナ専用病棟などの説明をオンラインで受けた後、医療従事者と懇談。北見赤十字病院、福島赤十字病院、沖縄赤十字病院の関係者から、コロナ禍の状況や対応を聴取。

硫黄島追悼式◆東京都が、太平洋戦争で激戦地となった硫黄島の戦没者追悼式を都議会議事堂のホールで開く。

11月23日

徳仁、秋篠宮◆皇居・神嘉殿で執り行われた宮中祭祀「新嘗祭」に臨む。秋篠宮が皇嗣として殿上で拝礼。

11月24日

**皇統譜**◆宮内庁が、天皇と皇族の戸籍に当たる「皇統譜」に、「立皇嗣の礼」の中心儀式「立皇嗣宣明の儀」を11月8日に行ったと登録。皇族譜に記載される。

**「皇女」**◆政府が皇族数減少に伴う皇室活動の担い手確保策として、女性皇族が結婚した後に「皇女」の「尊称」を贈り、「公務」への協力を委嘱する新制度の創設を検討していることが分かる。結婚後も皇族の身分を保持する「女性宮家」の創設は、女系天皇の容認につながる可能性があるとして見送る。

**11月25日**

**徳仁、雅子**◆赤坂御所で、大分県豊後大野市の高齢者団体と東京都渋谷区のシルバー人材センター関係者とオンラインで交流。

**日中関係**◆菅義偉首相が、中国の王毅・国務委員兼外相と官邸で会談。

**11月26日**

**「皇女」**◆国民民主党の玉木雄一郎代表が記者会見で、「皇女」制度について「問題があると思っている」。共産党の志位和夫・委員長が会見で「女性、女系天皇を認め

ていく方向での検討が必要だ。憲法に照らしても女性、女系を否定する根拠はない」。

**11月27日**

**新年一般参賀**◆翌年の新年一般参賀について、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて実施しないことを決めた。

**政治資金**◆総務省が公表した政治資金収支報告書で、武田良太総務相と堀内詔子環境副大臣の政治団体が靖国神社に、それぞれ1万2千円を支出していたと報道。武田総務相と堀内副大臣の事務所は取材

## 美奈の「皇相」

**天皇制を考えるwamセミナー、スタート！**

「二〇二〇年十一月三日、「wamセミナー 天皇制を考える」の第一回目として、池田浩士さんを講師に「叙勲・お言葉・思いやり……天皇と「国民」を結ぶもの——『明治節』に考える」を開催した。

wamでは、昨年の代替わりにあたって、「おわたんねっと」に賛同し、四月三〇日には「天皇制に終止符を」と題するアピールを出した。今回の代替わりの過程では、天皇制を擁護する「良心的知識人」が増え、女性天皇を支持する「フェミニスト」も登場した。

社会全体に広がるこの空気は、天皇制について議論することさえ難しくなるのではと、危機感を感じるものだった。

「女性国際戦犯法廷」から二〇年の節目にあたる今年、人道に対する罪としての日本軍性奴隷制の責任者として天皇裕仁に「有罪」を宣告した女性たちの闘い、その思想を引き継ぐwamにできることを話し合った。そして、二〇二〇年九月一日以降、天皇が生まれた日と「紀元節」の四日間を「祝わない」ために開館し、天皇制を維持してきた責任を見つめなおし、議論する場を作っていくことにした。その第一回目に池田浩士さんを京都からお迎えし、時間と「場」を共にできたのは幸いだった。

福沢諭吉と植木枝盛の天皇観を振り返りながら、天皇制を問うとは、土族に「豚」や「情海の塵芥」として「精

神を収攬」されず、撃滅・帰順させられず、稀有な一〇分の一として生き続けることである——。三時間に及ぶセミナーにはオンラインと会場で八八名が参加、質疑応答も活発で、「明治節」とは何かを知りたくて来たという人との出会いの場でもあった。

(渡辺美奈/wam)

### 崎原盛秀さんを悼む

「私たちが大きな影響を受けた崎原盛秀さんが十一月四日亡くなったことを知らされ残念でなりません。仲間が大変お世話になったこともあり、私と他に一名が十一月六日の告別式に参加しました。高速バスを降りてタクシに乗ろうと思っていたのですが、タクシはなく、二人で大きな荷物を持ってトボトボ歩いていると地元の人が見かね

て告別式の会場まで車で送ってくれ、ウチナンチューの優しさを改めて感じました。

会場は駐車場に入る車が列をなし、会場の外まで参列者が溢れている状態で崎原さんのすごさを実感しました。弔電が読み上げられている中で最後のお別れをしました。出口には崎原さんの若い頃の写真や映像が流されていました。

私たちが崎原さんと知り合ったのは「金武湾を守る会」の反CTS闘争でした(私は当時まだ活動に参加していません)。崎原さんの「代表はいない。『人びとりが代表』。誰も他者の命を代表できないという思想があった」(沖縄タイムス/2019)姿勢は会った瞬間に感じていました。一連のヤマトによる沖縄支配や、沖縄の自立解放に向けて闘い続けてこられた姿勢に、ヤマ

トンチューとしてこの日本国家とどう闘い、連帯していくのかを突き付けられています。また、崎原さんは、沖縄靖国合祀ガッティンナラン訴訟の原告の一人でもありました。

(野村／労活評)

## 天皇も跡継ぎもいない！「立皇嗣の礼」反対緊急行動

「立皇嗣の礼」が強行された一月八日、「天皇も跡継ぎもいない」11・8「立皇嗣の礼」反対緊急行動」が原宿・神宮橋で取り組まれ、渋谷・宮下公園までのデモを行った。主催は、「国家による『慰霊・追悼』を許すな！8・15反『靖国』行動」。

閣議では、この日各府省で「日の丸」

を掲揚するほか、地方自治体や学校、会社などに掲揚への協力を求めることを決めた。衆参両院などは、「立皇嗣の礼」に祝賀の意思を表す「賀詞」を、決議していた。あらためて秋篠が「次」の天皇であると宣言するこの儀式は、まさに一連の「天皇代替わり」儀式の最後に位置づけられるものである。

デモ出発前のアピールでは、主催者あいさつに続いて、反戦・反天皇制労働者ネットワーク、アクティブ・ミュージアム「私たちの戦争と平和資料館」(wam)、オリンピック災害おこしわり連絡会から連帯アピールを受け、最後に実行委メンバーが「緊急行動アピール」を読み上げた。

集会後、表参道から渋谷に向けたデモに出発。「立皇嗣の礼に反対」「天

皇も皇嗣もいない！」「皇位継承の儀礼を認めないぞー」などのシュプレヒコールを響かせた。

このデモに対しては、随所で右翼の攻撃が目立った。明治通りでは、デモ隊に突っ込んできた右翼によって転倒した参加者が負傷させられた。右翼の暴力を許さず、原則的に反天皇制運動を持続していこう。参加者は九〇名。

(北野誓／実行委)

## いまこそ中止だ 東京五輪！11・8 街宣&13 集会&15 デモ

バツハの来日が定まらない中で、私たちは一刻も早く東京オリンピック・パラリンピックの中止決定を求める行動を企画した。

### 【学習会報告】

#### 山田朗 『日本の戦争Ⅲ 天皇と戦争責任』

(新日本出版社・二〇一九年)

本書は、天皇の戦争責任回避の根拠として定説となっていた、天皇「無答責」論と実態としての天皇の戦争不関与という間違いを正していくことを大きな目的に編集されている。一九九五年の「現代における戦争責任」問題——天皇の「戦争責任」論を中心に「二〇一六年「昭和天皇実録」の軍事史的分析」と、およ

そ二〇年間に書き積み上げられてきた研究論文の集大成である。

著者は、様々な言論によって作り出された昭和天皇裕仁「無力で戦争に消極的な立憲君主」といったイメージを覆すために、一次資料を丹念に読み、裕仁はただ座ってハンコを押すだけの無能・無害な君主では決してなかったことを証明

するため、長期にわたる研究を続けてきた数少ない実証主義歴史研究者だ。一方で、裕仁の戦争関与に関する実態を暴露していくことで、これだけ作戦等への関与があったのだから戦争責任なしとは言わせないとした主張の新しさと言説力の強さに私たちは気を取られすぎ、明治憲法下で元帥・戦争の最高責任者という地位にあるというだけで逃れようもないはずの責任から、逃れきったことの問題は伝わりづらくもなっていたかもしれない。著者にとっては当たり前のことであったらうその側面が、それが目的で

一〇月三〇日からは横浜スタジアムでの満席実験、そして一一月八日には屋内実験として四か国による国際体操競技大会とコロナ状況の拡大にもかかわらず、観客OKパフォーマンスが行われることに抗議して一一月八日に原宿神宮橋で街宣行動。

一三日夜には文京区民センターで集会。当会の鶴飼哲さんは「コロナウイルスに打ち勝つ人類とはなんなのか」という問いに対して「ウイルスに打ち勝つ」と「ウイズコロナ」とが同義になってきている構図が「なんでもありの強硬路線」を強要できる下地を作っていることを喝破した。ジャーナリストの藍原寛子さんは今年七月に撮影した福島県浜通りの聖火リレーコースの映像を紹介しながら、「復興五輪」と

あったかどうかはさておき、そのあたりもフォローされるような編集となっており、完璧さは増し、裕仁断罪への執念を感じさせる一冊だ。

学習会では、天皇の曖昧で漠然とした「下問」によって作戦が変更されたりするあたりの詳細な記述に、天皇制の「忖度政治」の「伝統」を読み、天皇のわがままぶりに呆れ、久しぶりに裕仁への悪口三昧で盛り上がった。

次回は、一一月一五日(火)、坂野潤治『明治憲法史』(ちくま新書)を読む。

(大子)

福島は現状とは、どう見ても結びつかない。『復興五輪』の主体となる福島の人々は、疲弊しており復興どころではない」と訴えた。

一五日の新宿アルタ前街宣では、オリンピック終息宣言展を来年二月に行うアーティスト、入管収容中に暴力を受けたクルド人難民、「オリンピック追い出しをやめろ！国賠」、リモートで釜ヶ崎、そして福島からは「避難民の生活は厳しくなり、子供たちの様々な病気も多発している。汚染水の再利用も実験段階に入り、汚染水放出の動きもめちやくちやだ」と力強いアピールがあった。

街宣後九〇人参加でデモに出発。都庁前を通り新宿中央公園で解散。

バツハ来日のスケジュールをようやくつかんだ反五輪の会のメンバーを中心としてバツハ来日初日一六日には都庁前で、一七日には新国立競技場前で抗議行動が急遽行われた。間近まで詰め寄られたバツハは会見で、対話の姿勢はなく叫び続けているだけだったと言いつつ、直接市民の声として中止一択を浴びせかけられたことは大きな収穫といえるだろう。日本の大マスコミは一切報じなかったが、ネットではかなりその様子も共有化されていた。五輪中止に向けてさらなる声を！（宮崎俊郎／オリンピック災害おこことわり連絡会）

## 八天日誌

10月23日（金）●オリンピックおこことわりリンクスタンディング

11月3日（火）●wamセミナー 天皇

制を考える「叙勲・お言葉・思いやり」：天皇と『国民』を結ぶもの（集会報告参照）

11月8日（火）●今こそ中止だ東京五輪国際体操大会への対抗アクション（集会報告参照）

●天皇も跡継ぎもいない！「立皇嗣の礼」反対緊急行動（集会報告参照）

11月11日（水）●即位大嘗祭違憲訴訟（差し止め差戻審）第二回口頭弁論

11月13日（金）●今こそ中止だ東京五輪！ごり押し五輪だ！ Go Go Ee三集会（集会報告参照）

11月15日（日）●今こそ中止だ東京五輪！ごり押し五輪だ！ Go Go Ee三デモ（集会報告参照）

11月18日（水）●湯浅欽史さんを偲ぶ会

11月23日（日）●オリンピックおこことわりリンクスタンディング

11月27日（金）●東海第二原発を止めよう！集会

## 注会情報 INFORMATION

12月9日（水）●即位大嘗祭違憲訴訟（差し止め差戻審）第三回口頭弁論

10時15分開廷／東京地裁708号法廷（地下鉄霞ヶ関駅ほか）

12月12日（土）／2021年11月末予定

●天皇の戦争責任・忘却する「国民」

女性国際戦犯法廷から20年（仮）13時〜18時（月・火・休日休館）／wam 女たちの戦争と平和資料館（地下鉄早稲田駅）／主催：同館

●女性国際戦犯法廷の判決／証言を未来にどう活かすか

13時〜／オンラインのみ・要事前申込み／ウスティニア・ドルコボル、阿部浩己、李娜榮ほか／主催：女性国際戦犯法廷20周年実行委員会（問い合わせ houai20@gmail.com）

●菅政権の暴走を許すな！

18時〜／文京区民センター2A（地下鉄春日駅）／前田哲男、額額厚ほか／主催：重慶大爆撃の被害者と連帯する会・東京（0335015558 元永）

12月13日（日）●南京大虐殺から83年2020年東京証言集会

14時30分〜／全水道会館大会議室（JRほか水道橋駅）／細工藤龍司／主催：ノーマア南京の会（0338899499）

●私たちの街に米軍ミサイル部隊司令部はいらない！ 町田集会

17時45分開場／町田市健康福祉会館（小田急ほか町田駅）／池田五律、清水早子、福本道夫ほか／主催：厚木基地爆音防

止期成同盟町田支部（080-2003-8163 山本）

12月20日（日）●STOP！宇宙軍拡集会（仮）

18時30分〜／文京シビックセンター4Fシルバール（地下鉄後楽園駅ほか）

か）／西川純子／主催：大軍拡と基地強化にNO！アクション2020（0335015558 元永）

12月20日（日）●シビル市民講座「ベルリンの壁」崩壊後のドイツ・第四回

13時30分〜／柴中会公会堂（JR立川駅南口ほか）／米沢薫／主催：シビル（042-5249014）

12月21日（月）●即位大嘗祭違憲訴訟（差

国賠請求分）第六回口頭弁論

14時30分開廷／東京地裁103号法廷（地下鉄霞ヶ関駅ほか）

●持つな！敵基地攻撃力！敵地先制攻撃力 防衛省デモ

18時集合・18時30分デモ出発／外濠公園（JRほか市ヶ谷駅）／主催：大軍拡と基地強化にNO！アクション2020、戦争・治安・改憲NO！総行

動実行委員会（0335015558 元永）

12月22日（火）●明治公園オリンピック追い出しを許さない国賠訴訟 第九回口頭弁論

11時30分開廷／東京地裁706号法廷（地下鉄霞ヶ関駅ほか）

12月23日（水）●オリンピックおこことわりリンクスタンディング

\*会場等の理由により中止・延期の可能性あり。主催者へのご確認を。

## Q...神田川

●あつ、もつスペースが……。 (貌)